

フラスコから覗いた ニューヨーク 小原孝弼

一九七三年、夏、私はニューヨークに二週間滞在した。

ニューヨークの中心、マンハッタンには現代社会のあらゆる欲望と絶望が同居している。アメリカ二百年の歴史のなかに築きあげられた摩天楼は、文明の象徴のように空高くそびえている。

しかしこの象徴は、スモッグと煤煙で薄汚く染まり、ハドソン川の対岸から望むと、アメリカ的繁栄の終焉を感じさせるコンクリートの墓場のように佻しくみえる。

そしてこの街の底には人間が文明とひきかえに失ったものが、おびただしい混沌と

なっている。陽気と悲哀、名譽と坐折、億万長者とア

ル中、殺人者とファンキーなアメリカ女、金髪とマイノリティ。酒、ボルノ、女、麻薬……人間がつくりだしたあらゆる驕奢と〇腐が、ここではのべつ気取りもなく時を抱いてのし歩いている。

ノット・マイ・ビジネス——他人のことなんか知ったことじゃない。大都会特有の生きるための戒律で育てられたニューヨークカーたちは、次第に、正義とは、金と権力、自由は、セックスとマリファナの代名詞に置きかえようとしている。

質はともかく、量だけはいくらでもあるニューヨーク情報を、屑の山を掘りかえすようにして探したし、東京を発った私だったが、偉大な田舎都市、ロスアンゼルス、デトロイトを廻っているうちに、アメリカ文化の固定観念がこわされ、十日目にニューヨークについた時には、どうにもこの街が見えてこなかった。

そこで私は、その日の取材の仕事が終ると、いつも頭をアルコール漬けにして思考能力を麻痺させてしまうことにした。そうしなければ、この街の底の部分が見えてこないような気がしたからだ。

その日も「お疲れさん」といって、スタッフと別かれ部屋に帰ると、いつものようにバーボンでうがいをし、ライウィスキーで顔を洗って、オン・ザ・ロックのように冷たいシャワーを浴びてから、パーク・アベニューにあるホテルを出た。

ニューヨークの夏の陽は高く、夜八時になっても空は白夜のように明るかった。

私はこの短い滞在期間中に、一九〇〇年ごろからニューヨークを舞台として書きつ

づけた作家、オー・ヘンリーと、それから四十年おくれて出てきたウィリアム・アイリッシュの好む裏街を、グリニッチ・ビレッジを、ブロードウェイを、一人であてどもなく歩いてみようと思った。そうして、できることならこの二人がまだ芽の出ないころ住んでいたアパート「チェルシー」を訪ねてみたいと考えていた。

五番街を南に行きついた所にワシントン広場がある。ちょうど広場の正面に立っているビレッジ・ゲートと称するパリの凱旋門を小型にした薄汚い門を境にして、右がウエスト、左がイーストと分かれている。グリニッチ・ビレッジはそのウエストに広がっている。

私はここに一步足を踏み入れて、あっ、と思った。一九〇〇年始めのニューヨークがそこにあるような気がしたからだ。

オー・ヘンリーの「最後の一片」の冒頭に出てくる文章と同じ風景がそこにひろがっていたのだ。

『ワシントン・スクウェアの西の界限にくると、通りが目茶苦茶に錯綜して「小路」

と称する短い帯のような形にちょん切れている。この「小路」というのがまた奇妙な角とカーブをなしているのである。一本の通りが、一度や二度は、自分自身で交叉しているという始末なのだ。ある画家が、かつて、こういう通りに貴重な可能性を発見した。まあ考えてもみたまえ、集金人が絵具や紙やカンヴァスのつけを持って、この道を通ってやってくる、ところが分割払いの一セントだつてもらわないうちに、帰ってくる自分自身にばったり会ってしまう、というわけで、この一風変わった古色蒼然たるグリニッチ・ヴィレッジに、やがて絵画き人種が、北向きの窓、十八世紀風の破風、オランダ風の屋根裏部屋といった安い間代のところを求めて、ほつつきながら、集ってきた。』

今日のビレッジも、赤レンガの古い造りの建物の下をヒッピーや、前衛風の芸術家、旅行者が往来して、下町の風情を楽しませてくれる。ことに夜は、オレンジ色のナトリウム灯が落ちつきをもった光を放ち、両脇に立ち並ぶ建物が黒い輪郭を残して、十

九世紀の彼方に沈んでいくようにしている。セブンス・アベニューから、二十三番街の西へ入ったあたりに「芸術アパート」と呼ばれている「チェルシー」をみつけた。「チェルシー」は、オランダ風の屋根裏部屋をもった赤レンガの十階建て、いまは一晚十ドルの安ホテルとして使われている。ここには現在でも、オー・ヘンリーやアイリッシュを夢みる若者や、画家の卵たちが相部屋を借りて住んでいた。

私はこの街で、ダニイという名の十五才の黒人の少年と友達になった。飲めば必ず泥酔する酒のびんをシャケットのポケットにつつ込んで、私はダニイと二人で、ニューヨーカーに怖れられているイーストエンドの裏街へやってきた。

裏街には、目の前で化粧を落した酒場女のような哀しさがあって私は好きだった。イーストエンドの裏街は、へんに臭くて刺激的で女の匂いがある。子供の泣き声と、大声でわめき散らしている酔っぱらいの黒人と、ひっぱたかれてわめく女たちの声が聞えてきて、この街にいます、私はな

んだか自分が生きているみたいなきががした。この街の底の部分は、ワインを明りにかざしてみると沈黙物があるのがわかるように、この街に住む人々は誰もが底の部分で蠢いていた。

ダニイは、この歳になるまで、一度もニューヨークから出たことがないといった。「ねえ、ダニイ、君はニューヨークから出たいって思わないか？」

「わからない……だって、他はどこも知らないんだ……だが、海が見たい」

私がニューヨークを立つという前々日、ダニイはそういった。

私は、ダニイを連れて、もう今ではこの街を代表していないエンパイヤ・ステートビルの屋上に登った。

はるか向うに鉄色に錆びた大西洋が見えた。海といえば錆びついた海しかないニューヨーク。そののが不思議でないニューヨークを見おろしながら、まだ私にこの街は見えていないかと、溜め息をついた。

次の朝、雲ひとつなく晴れ渡ったケネディ空港を飛び立ったジャンボは、ぐんぐん

と高度を増しながら、磨き込んだように青く光る大西洋の上をイングランドに向かっていた。

太陽の光の眩しい窓際の座席で、私の頭の中は、二日酔いで重く、まだニューヨークの聖バトリック大寺院の鐘が鳴っていた。

アイリッシュが描くところの大都会の群衆のなかにいる人間の孤独のなかに、異常な状況に追いつめられた主人公たちの焦躁と絶望感をもった人間は、ニューヨークのどこにも見つけることができず、私はその脇役にもなれなかった。

研究室だより II

◇ことしはよく雪がふります。今も研究室の窓をねらって降りしきっています。

「富士の高嶺にふる雪も／京都先斗町に降る雪も／雪に变りはないじゃなし／」

：「と山之内さんが口ずさみました。『雪に变りはないじゃなし』ってなあに？と田辺さんがいいました。二重打消しなら『雪に变りはあるじゃなし』でしょう……」

◇下の「なし」は打消しかしら？語りかけるときの「变りはないじゃなし」のないうという強調の助詞なんじゃない？だったら「助詞じゃなし」ってわけね「なんだから、わけがわかんなくなっちゃうじゃなし」

◇げらげら降りくだる雪をながめながら、お二人は雪のように白い歯を見せています。ほんとに歌謡曲の歌詞にはいいかげんなのが多いようです。

◇それにしても今日ふる東京の雪は絶対に富士にふる雪とは別ものです。このベトつく雪はダラクした雪。雪の風上にもおけぬ黒いガセネタの雪。濡れた宇宙塵です。

(A)